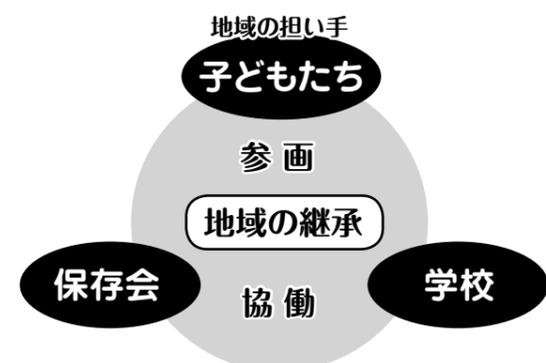


*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

キーワードは、地域の継承、協働、参画



🔑 協働……「協力」ではなく

保存会、学校、子どもたちが、それぞれの役割を持ち一緒に作り上げています。学校だけでは取り組めない学び、保存会だけでは伝えきれないことを、互いに協力することで可能にしています。特に子どもたちへ地域の学びのきっかけを与えるという学校の役割は重要です。

🔑 参画…「参加」ではなく

「にとはちさま」に出演する子どもたちは、大人たちが企画する催しにお客様のように参加するだけでなく、大切な役割をもって関わります。舞台上上がる人も、そうでない人も、上演のためには、その時に自分にしかできない役を誠実に演じることが大切です。それは舞台を降りても同じです。今自分にしかできないことを、自ら工夫しながらより良くしていく、その楽しさを表現を通して学んでいくことになりました。

🔑 地域の継承……「地域を知る」ではなく

「土を愛することは、ふるさとを愛すること」。助け合って生きてきた人がいるから、今自分もここに生きていること。自分たちは、その思いを受け継いでいかななくてはならないこと。それがこの地域に生きるみんなが共有していきたい「にとはちさまの思い」です。子どもたちは、演じることを通してそれを感じ、表現・感動という形で地域に手渡しています。

地域の人と、地域の伝承を「お芝居」に
私たちは、何を大切にしてきたか…
地域の願いを共有する
長野市古牧地区の活動から



第8回公演 古牧小学校



第12回公演 緑ヶ丘小学校



第13回公演 南部小学校

先生から 長野市立南部小学校

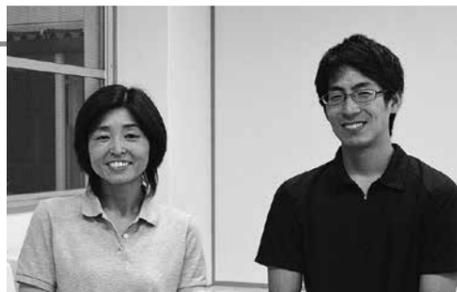
民話劇をとおして楽しみながら学ぶ

3年前は6年生全員で演じました。地域の歴史を知って、いこうという学びに位置づけました。

その年の公演は秋で、2学期の総合の活動です。社会、国語、総合の時間とつなげながら進めました。演じる中で、当時の人間関係や厳しさを感じる学びができました。

保存会の方は厳しいのですが、先生が怖いから嫌だっという子はいません。大人たちの一生懸命さがわかるのですね。主役の子もわき役の子も心に残る時間になっていました。ちょっと自分に自信がない子が、練習を重ねる中で「私、劇好きかも。それまで考えたことなかったけど」と、表現することで自分の良さを見つけてくれたのは嬉しかったです。それは学校の活動だけではとても引き出していけなかった。劇という表現の素晴らしさを感じました。

地域の歴史を伝えたいという地域の方と劇を通してふれ合うことによって、子どもたちにも「にとはちさまの思い」を大事にしていこうという気持ちが育ちました。その気持ちは色々なものを大事にする心につながると思



新井篤子先生
第10回公演時の担当

権田昭芳先生
第13回公演 担当

います。

助弥さんがいたからこそ、今の自分がある。そんな命のつながり、苦しい時代の仲間との心のつながり、正しいと思ったことは行動に出るような生き方を受け止めていました。

(新井先生談)

助弥さんの生きざまを自分に重ねて、自分の生き方をふりかえられるようになってほしいなと思います。今年度は全員が関わっているわけではありませんが、演じている子は自分を開放して表現する楽しさを感じているようです。

(権田先生談)

事例の概要

語り継がれてきた伝承を
児童劇として復活

長野市古牧地区は、長野駅東側に広がる一帯で、昔ながらの農家や田んぼが残る一方、ビルや新しい家が急速に増えた地区です。この地区にある3つの小学校(古牧、緑ヶ丘、南部)では、例年持ち回りで民話劇「にとはちさま」を上演しています。

「にとはちさま」とは、今から340年ほど前、越訴(幕府への直訴)という手段で善光寺平の村々の窮状を訴え、村の人々を救った若者「助弥」の物語です。

村の人々のために訴えを起こし、罪人となって処刑された助弥のために、当時の人々は祠や神社を建てました。村の人々はそれを彼が訴えた「二斗八升」の年

貢」にちなんで「にとはちさま」と呼び、語り継いできました。それは、当時の人々のひそかな感謝のしるしでした。

平成14年の長野市制100周年の機会に、この物語が児童劇として初めて上演されました。それをきっかけに、地区内にある3つの小学校で、毎年持ち回りでこの民話劇が上演されることになったのです。本年度13回公演は南部小学校4年生から6年生の有志16名による「劇団スター」が演じました。

「にとはちさま」への地域の思い

「にとはちさま」の物語は、小学生による上演が始まった当時、地域の人々にも忘れ去られていました。高齢の方は、娯楽が少なかった時代にお祭りでお芝居が上演されていたこと、「にとはちさま」にちなんだ商品が行商で売ら

れていたことなどを覚えていましたが、今ではそのような機会もありません。

昔の人たちが必死で守ってきた土地に今自分たちは生きているということ、ふるさとの「土」を守って、これからも生きていくということ、みんなが生きていくために、知恵や力を出し合うこと、みんなの幸せのために正しいと思ったことのために行動すること…地域の人々が大切にしてきたそれらのメッセージは、時代が移り変わった現代でも、子どもたちに伝えたい。そうした地域の大人たちの思いに、学校が協力することで、この劇の上演が続けられてきました。



協力：古牧地区にとはちさま保存会、長野市立南部小学校、長野市立古牧小学校、長野市立緑ヶ丘小学校 写真提供：山浦剛典さん

発行日：平成26年9月20日 発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会

〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/



土を愛することは、ふるさとを愛すること。
その気持ちを忘れたら、人は生きていけない。

つながりマップ 感動

継承 ←



助弥さんが観たら喜んでもらえるようにがんばって演じたい!

「にとはちさま」のおかげで地域を見直すことができました。



緑ヶ丘小学校 OB 高校3年 高池貴太さん

成長

本番発表

助弥さんたちのような人がいたら、僕たちもここにいる!

またみんなと一緒にやってみたかったから手伝いに来ています。今回は裏方だけと楽しい。



古牧小学校 OB 中学1年 菅沼翔くん



喜び

指導は厳しいけれど、みんなで演じるのはすごく楽しい!



なんども稽古

最初は、こっかが声をかけないと動かないし、これで芝居なんてできるのかなって。でもそのうち自分たちで動くようになって、変わってきたかな。終われば先生たちが感心するほど子どもたちは成長したと先生たちも言っています。



演出 劇団空素 小池晃弘さん

気づき

台本読み合わせ



この場面では、この人はどんな気持ちなんだろう。

地域の大切なもの お宝 地域の拠り所

「にとはちさま」義民 助弥の物語



地域のためにがんばった人たちがいたんだね。

みんなでこの地域を大事に守ってきたんだ!

助弥さんはやさしくて勇気のある人!

協働

子どもたち

保存会の人たちも真剣だ。僕らも一生懸命やろう!

学校

南部小学校校長 山岸敬明先生

本番前、衣装を繕う保存会の方の姿が、助弥の母親のようでした。この地域の皆さんはこうして土を守り、子どもを育み、地域への思いを静かに燃やしているんだと思いました。

地域の伝承を掘り起こし

平成13年度に古牧地区長野市制100周年記念事業で、「今後も何か残せるものを」と「南高田に伝わる「義民助弥」の物語を地元の児童劇として継続しては」の声が起きスタート。

発見

児童劇としてスタート

第1回「にとはちさま」公演

保存会の設立

参画

3つの小学校で毎年公演

保存会

昔お祭りで「にとはちさま」の演劇をやったのを覚えているのは、今85歳とか90歳の人なんだよ。子どもたちが上演するまでは途絶えてた。



にとはちさま保存会 衣装、時代考証 西澤壽夫さん



私たち、自分たちの子どものように真剣に叱りますからね。でも、「にとはちの人だ」って、成長した後も覚えてくれたりするのが楽しいですね。



にとはちさま保存会 事務局 三上美智子さん

しっかり食べて、午後の練習をがんばろう!

PTA



地域の担い手として輝く子どもたち

「にとはちさまの物語を伝えたい」という思いを持つ地域の活動に、学校が協力し、子どもたちが参画する活動です。大人たちが企画する催しにお客様のように「参加」するだけでなく、また「お手伝い」をするだけでなく、大切な役割をもって関わっていくことで、学びを深めています。

指導や裏方、練習のサポートでかかわる保存会の皆さんと、舞台上で演じる子どもたちは、同じ目標に向かう対等な仲間です。

「にとはちさま保存会」の皆さんには、「にとはちさま」の物語をとおして、この地域を愛する心、この地域のために頑張った人がいたから今自分たちがあるということを伝えたいという思いがありました。子どもたちは、真剣な練習の中でそれを感じていきます。当日の彼らの熱演は、「にとはちさま」の物語を忘れ難いものにします。

「土を愛することは、ふるさとを愛すること」。助け合って生きてきた人がいるから、今自分もここに生きていること。自分たちは、その思いを受け継いでいかななくてはならないこと。

この地域に生きるみんなが共有していきたい「にとはちさまの思い」。企画した人、演じた人、見た人が、感動を通してそれを共有しました。子どもたちが地域の担い手として輝いた瞬間でした。

古牧地区にとはちさま保存会 会長 伊藤一之さん



「にとはちさま」の劇を始める前は、良い物語なのに、地域でも忘れられかけていました。この物語を埋もれさせたくない。それには子どもたちに伝承してもらおうが一番いいと、小学校での公演を始めました。続けていくために保存会も立ち上げました。それ以来ずっと、3つの小学校を回っています。10年経って、「にとはちさま」のことは地域の人たちに大分知れ渡ってきました。

地元の「伊勢社」の中にある天神社が助弥さんの神社だと知る人がいなくなると、伝承は途絶えてしまいます。助弥さんは古牧の人ですが、善光寺平全ての農民を救った人です。善光寺平にはこういう人がいたんだと、多くの人に知っていただきたいです。

他人のことを気にしない社会になっている中で、大切なものを犠牲にしてまで（もちろん命は大切にしなければいけないけれど）、何か他人のためにすることは、やっぱり素晴らしい。自分だけでなく他人のことも考えられる子どもたちが大人になっていけば、良い社会になっていくと思います。